

先生の御遺徳を偲びながら、御冥福をお祈り致したいと存じます。

和達先生の思い出

守田 康太郎

1. ノートはペンで

測候技術官養成所本科第10回生の私等が和達先生から地球物理学を教わったのは、昭和7年9月(2年2学期)からです。

先生の講義は、理路整然として格調高く、僅か14名の学生には勿体ないような感じでした。ある日、私が先生の講義を鉛筆で筆記していましたが、先生が「君は僕の講義を鉛筆でノートするのかね」と仰有る。私が慌てて「あとでペンで清書します」と申しますと、先生は「それならよろしい」とニコリなさいました。実を云いますと、「あとで清書云々」は、その場逃れの言い訳でしたが、云ってしまったからには実行せざるを得ません。そして、清書することによって先生の講義がいつそうよく理解できるようになりました。

2. 嬉しい転勤

昭和9年春、本科を卒業し輪島測候所へ赴任しました。輪島では所長事務取扱いの篝さん以下僅か3名で、気象観測通報、沿岸海洋観測、ウィーヘルト地震計保守、JGA受信と天気図作成など多彩な業務に追われていましたが、昭和11年に神戸から石井さんが所長として来任され、新人2名の採用も実現して、夜勤明けの休日には能登丘陵の山歩きを楽しむことも可能となりました。

その年の11月に中央气象台から人事異動の文書が届き、所長さんが「守田君！大阪支台へ転勤だよ」と仰有る。大阪支台の支台長は和達先生ですから、私は思わず、「ああ嬉しい」と云いますと、所長さんは「普通の人には『もうしばらく所長さんの下で働きたかったのに残念です』と云うのだが、君は変っているね」と仰有り、私は「どうも済みません」と謝りました。そして、翌日、和達先生から「貴君の来任は、百万の味方を得たような喜び」との御手紙を頂き、天にも昇る思いでした。

3. 和気あいあいの職場

大阪支台へ着任したのは、昭和11年12月でした。

大阪支台のスタッフは、広野、伊東、三宅、山本、桑野、坂田、金、唐津氏ら多士済々に松尾、軽沢、星野、作田の紅四点を加えて、午休みにはシューベルトの菩提樹を唱い、休日には生駒のハイキングを楽しむなど、和気あいあいの職場でした。

大阪支台で私に与えられた研究テーマは、「煙の都・大阪」の大気汚染実態調査でしたから、大阪市内の十数地点で捕集した大気中の塵埃について、その量を測り、顕微鏡写真を撮って実態を調べるなど、興味ある仕事と取り組んでいました。

4. 支那事変勃発

ところが、好事・魔多しと云いますか、昭和12年7月に支那事変(日中戦争)が勃発し、私は召集令状(所謂赤紙)を受け、輜重兵第10連隊(姫路)へ入営を命ぜられました。入営の前夜、大阪支台の皆さんが壮行会を開いて下さいましたが、その席で、和達先生は、渦の研究で有名なカルマン(ハンガリー)が、第1次世界大戦で研究を中断して参戦したが無事に帰国したことをお話になり、「君もカルマンのように、無事に生還されるよう祈ります」と仰有り、感激しました。

その頃、姫路師団は北支那の台兒荘の戦いに敗れて、私の友人や近親者の幾人かが、還らぬ人となりましたが、私は内地の予備隊で待機のまま召集解除となり、昭和13年の2月に大阪支台へ復帰することが出来ました。

そして、新しく与えられた研究テーマが、「超音波により霧を消す実験」でしたから、弱電専門の桑野囑託の指導下に、超音波発振機のコイル巻きに専念していました。

5. こんどは海軍

昭和13年7月、大阪支台作業室の市外専用電話が鳴り、書記の松尾さんが「和達先生、東京からです」と叫ぶ。電話に就かれた先生の緊張した御様子から、人事異動かなと思いましたが、果せるかな、先生は「守田さん！こんどは海軍ですよ」と仰有る。そして、翌

日の速達便で「支那方面艦隊嘱託、第2連合航空隊氣象班勤務」の辞令を受取りました。

第2連合航空隊は、昭和12年夏の支那事変勃発当時、「海鷲による渡洋爆撃」で勇名を馳せた部隊です。私はその氣象班として、南京→漢口→南昌→上海と転戦の揚句、昭和16年12月に帰国しますと、大東亜戦争（第2次世界大戦）が始まり、シンガポール→トラック→ラバウルと転戦し、昭和20年1月以降はB29による空襲下の東京で勤務した揚句、海軍氣象部大倉山分室（神

奈川県）で終戦の詔勅を聴きました。

6. 南極観測と和達先生

昭和31年に始まった我が国の南極観測は1956～57年の国際地球観測年（IGY）の事業として発足したのですが、和達先生は、南極観測事業の恒久化に努力され、第15次隊にはオブザーバーとして夏隊に特別参加なされ、昭和基地に2泊なさって越冬隊員を励まされました。

江戸っ子和達先生のユーモア

安井 正

私にとって、和達先生は雲の上の存在でした。只一度だけ、親しくさせて頂いたのは、1961年にホノルルで開催された太平洋学術会議に、ご一緒に出席させて頂いたときでしょうか？

ご一緒といっても、先生は正規の国費出張者で、宿舎もワイキキの真ん中にあるウェジウォーターホテルという歴とした観光ホテル。私は、NSF（アメリカ科学財団）の丸抱え旅行団の一員で、米軍の輸送機に詰め込まれて渡航し、宿舎もワイキキのはずれにある、新築とはいえクーラーもないアパートメントホテルでした。その一室で、増沢譲太郎（後氣象庁長官）、半沢正男（後神戸商船大教授）両氏と3人で自炊生活をしました。

会期の真中の週末の昼休みに、木陰でハンバーガーをばくついていますと、和達先生がおいでになられ、「おいしそうに食べていますね。今日は場内のレストランが休みで、兵糧攻めですよ」と微笑まれました。

私たちは自炊ですから、レストランの休業など無関心だったのです。先生に「こんなもの召し上がりますか」とお尋ねすると、「どこへ行けば買えますか」とのお話。しばらくお待ち願うこととし、ハンバーガースタンドへ走り、ハンバーガーの包みとセブンアップの缶とお渡しした。先生は丁重に礼を言われ、一緒に召し上がりました。そのときどんなお話をしたか、思い出せませんから、ずいぶんと緊張していたのだと思います。

後日、半沢正男氏が和達先生にお目にかかったところ、「このあいだのお昼、安井君に美味しいものを食べ

させてもらった」と大変お喜びで、また「あんな美味しいものを毎日食べているのかねー」と申されたこと、伝えられました。

学会で先生は、地震のセッションの最後の講演者として、チリ地震の際に観測された T-Wave についての発表が予定されていました。それまで会場では、互いに相手の異説を折伏させようと激しい応酬があり、緊張が漲っていました。私はこの雰囲気半ば圧倒されながらも、先生のお話を一言一句聴き逃すまいとして、最前列の席を陣取り待ち構えておりました。

先生は、例のゆったりとした足どりで壇上の人となられ、やおら “In Japanese variety shows, the most famous artist appears last. But, I appear here only by author’s alphabetical order.” と、切り出されました。会場に和やかな笑い声が起り、張りつめた空気が一気に弛んだように感じました。私も、びっくりすると同時に緊張が解けて、先生のご講演は非常に良く理解できたような気がしました。

先生のこの冒頭の枕は、その後、国際学会のセッションの最後に当たったときに何度も使わせて頂いたし、最初に当たったときには “In Japanese variety shows, an apprenticed artist appears first” と少し変形させていただき、好評を博しました。

4、5年前の氣象庁海洋課設置50周年記念パーティーの席上で、このお話を先生にしたところ「そんなことを言いましたかねー。しかし、あのときは楽しかったですね。」とニコニコされました。

当時、伊勢湾台風やチリ地震津波などが続き、先生